

哺乳類

1. 選定・評価方法の概要

検討対象範囲は、東京都島しょ部において、現在生息が確認されているか、明治時代頃まで生息の記録がある在来の哺乳類のうち、陸域を生活の場とするもの、及びアザラシ類など陸に上がる可能性があるものとし、海域だけにみられるイルカ・クジラ類は対象に含めなかった。

絶滅のおそれの評価は、基本的に定量的要件を用い、CR(絶滅危惧 IA 類)と EN(絶滅危惧 IB 類)も区別した。

検討対象種として、伊豆諸島については、前回(1998年版)は含まれていなかったユビナガコウモリとニホンアシカの2種を加える一方、前はアカネズミとは別の種とされていたミヤケアカネズミ(三宅島個体群)を、亜種オオシマアカネズミ(大島、新島個体群)とともに、アカネズミ1種にまとめ、合計7種とした。この取り扱いは、いずれの亜種に属するか不明な個体群(式根島、神津島)があることや、遺伝的・形態的に新島個体群が大島個体群より三宅島個体群に近いと考えられること(Kageyama et al., 2009)などから、既知の亜種を評価単位とするのは適切でないと考えたことによる。小笠原諸島については、前回のオガサワラオオコウモリにオガサワラアブラコウモリを加えた2種を検討対象とした。

2. 選定・評価結果の概要

<伊豆諸島>

評価の結果、ニホンアシカ1種を EX(絶滅)、ユビナガコウモリ1種を DD(情報不足)とした。ニホンアシカは、1908年(明治41年)まで神津島に生息していたという記録がある(環境庁, 1991)。ユビナガコウモリは、これまで伊豆諸島で記録がなかったが、2009年9月から11月に大島の行者海岸トンネル内で複数個体が確認されており(天野ら, 2011)、島外からたまたま飛来したとも考えられるが、少数が定着している可能性もあることから DD と評価した。以上の2種のほかに種全体としていずれかの絶滅危惧カテゴリーに該当する種はなかったが、アカネズミの三宅島個体群は、短期間の現地調査でも生息が確認できるなど、当面絶滅のおそれは高くはないと考えられるものの、外来のニホンイタチによる捕食と2000年の噴火の影響を大きく受けている可能性があるため、NT相当の地域個体群(LP)と評価した。キクガシラコウモリとコキクガシラコウモリの2種は、現地調査により利用洞穴で相当数が確認されるなど、伊豆諸島全体としては絶滅のおそれは低いと考えられる。しかし、伊豆大島と御蔵島においては、コキクガシラコウモリの利用が知られていた洞穴(防空壕)が改変を受けており、現地調査では生息が確認できなかった。洞穴性コウモリ類は、このように、採餌環境である森林が保全されていても、人為によって生息拠点が失われることの影響が大きく、保護上の配慮が必要と考えられることから、2種ともに留意種とした。ニホンジネズミとニホンイタチは、生息状況に懸念すべき点は知られておらず、いずれのカテゴリーにも該当しないと評価した。

今後の課題として、とくにコウモリ類による洞穴(人工・天然を問わず)の利用状況について調査を行い、重要な洞穴については周辺環境を含めて改変を受けないような配慮をすることが望ましい。

<小笠原諸島>

検討対象となった2種のうち、オガサワラオオコウモリは EN、オガサワラアブラコウモリは EX と評価した。ただし、オガサワラアブラコウモリは、19世紀末に母島で採集されたと言われ

る模式標本1個体が知られるのみで、本当にここで繁殖していたのか疑問視する意見がある(前田, 2001)。オガサワラオオコウモリは、個体数はきわめて少ない(諸島全域で合計200~300頭)ものの、近年は安定もしくは漸増傾向にある(鈴木・稲葉, 2010)ことからENと評価した。

小笠原諸島の固有種であるオガサワラオオコウモリは世界的にみても重要な保全対象である。現在、オガサワラオオコウモリの脅威となっている要因として、生息記録がある島のうち、南硫黄島以外の島(父島、母島、北硫黄島、硫黄島)において、外来種であるイエネコの捕食、ネズミ類による餌競合と植生への影響、さらに主要な生息地である父島では、ねぐら域の開発・攪乱、食害防止ネットへの絡まり事故などがあげられている(鈴木・稲葉, 2010)。これらの問題解決のため、早急かつ適切な対策が望まれる。また、復帰当時(1968年)、数百頭規模の生息が知られていた母島では、生息環境は維持されているにもかかわらず、1970年代後半以降、数頭程度の情報があるだけで現在まで回復が認められない。この原因を究明し、安定した個体群の確立を図ることも重要な課題である。

【引用文献】

天野典子・天野洋祐・成瀬裕昭, 2011. 伊豆大島におけるユビナガコウモリの初記録. コウモリ通信, 18(1): 7-9.

Kageyama, M., M. Motokawa & T. Hikida, 2009. Geographic variation in morphological traits of the large Japanese field mouse, *Apodemus speciosus* (Rodentia, Muridae), from the Izu Island Group, Japan. *Zoological Science*, 26: 266-276.

環境庁, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—脊椎動物編. 日本野生生物研究センター.

前田喜四雄, 2001. 日本コウモリ研究誌. 東京大学出版会.

鈴木創・稲葉慎, 2010. 空飛ぶ森の守り神と島々の未来—オガサワラオオコウモリの生態と保全策—. 遺伝, 64(4): 61-67.

(石井 信夫)

キクガシラコウモリ

*Rhinolophus ferrumequinum*コウモリ目(翼手目)
キクガシラコウモリ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

前腕長 52～65mm、頭胴長 55～82mm、尾長 28～45mm、体重 16～35g。比較的大きいコウモリで、体毛は淡褐色。吻には鼻葉がある。昼間は洞窟などに集団で休息する。翼で身体を包むようにして休む。主に樹林内や林縁で採餌し、ガ類や甲虫類など大型の昆虫類を食べる。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

洞穴や防空壕跡をねぐらとして利用し、樹林などで採餌する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

防空壕跡には、危険防止のため入口をふさがれたり、埋められたりして、コウモリが利用できなくなっている箇所がある。多数個体が利用する重要なねぐら場所や繁殖場所が改変されれば地域個体群に大きな影響が及ぶ可能性がある。

【関連文献】

佐野明・福井大(監修), 2011.

(執筆: 石井信夫・土屋公幸)



コキクガシラコウモリ

*Rhinolophus cornutus*コウモリ目(翼手目)
キクガシラコウモリ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

前腕長 36～44mm、頭胴長 35～56mm、尾長 16～30mm、体重 4～9g。小型のコウモリで、体毛は淡褐色。吻には鼻葉がある。昼間は洞窟などに集団で休息する。翼で身体を包むようにして休む。主に樹林内で採餌し、ガ類やハエ類、カ類など小型の昆虫類を食べる。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

洞穴や防空壕跡をねぐらとして利用し、樹林などで採餌する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

防空壕跡には、危険防止のため入口をふさがれたり、埋められたりして、コウモリが利用できなくなっている箇所がある。重要なねぐら場所や繁殖場所が改変されれば地域個体群に大きな影響が及ぶ可能性がある。

【関連文献】

佐野明・福井大(監修), 2011.

(執筆: 石井信夫・土屋公幸)



ユビナガコウモリ

*Miniopterus fuliginosus*コウモリ目(翼手目)
ヒナコウモリ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

前腕長 45～51mm、頭胴長 59～69mm、尾長 51～57mm、体重 10～17g。昼間は洞窟や防空壕に群れで休息する。集団の大きさは数百から数千にもなる。休息時には翼を前側に折りたたむ。樹冠上や草原など開けた空間で採餌し、ガ類やハエ類などの昆虫類を食べる。行動域が広く、季節的な長距離移動をすることが知られている。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

伊豆諸島では 2009 年に大島東岸の行者海岸トンネル内で観察されたのが本種の初記録であるが、定着しているかどうかは不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息状況は不明であるため、調査を行うことが望まれる。

【関連文献】

天野典子ら, 2011; 佐野明・福井大(監修), 2011.

(執筆: 石井信夫)



© 成瀬裕昭

ニホンアシカ

Zalophus japonicus

ネコ目(食肉目)
アシカ科

伊豆諸島

EX

環境省

CR

【形態・生態】

雄成体は全身暗褐色、若い雌成体は灰褐色。雄成体の平均体長は 240cm、平均体重は 490kg。雌成体の体長は 180cm、体重は 120kg と推定されている。食性など生態の多くは不明である。

【分布の概要】

日本周辺海域に分布していた。

【伊豆諸島における生息環境】

式根島、恩馳島に繁殖場があったが、現在は見られない。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在は絶滅している。明治期以降の過度の捕獲が原因と考えられている。

【関連文献】

和田一夫・伊藤徹魯, 1999; Isono, T. & T. Inoue, 2009.



© 天王寺動物園

(執筆: 石井信夫)

アカネズミ (三宅島個体群) ※備考 (p. 308)

Apodemus speciosus

ネズミ目(齧歯目)
ネズミ科

伊豆諸島

LP

環境省

【形態・生態】

頭胴長 80 ~ 134mm、尾長 70 ~ 114mm、体重 20 ~ 60g。尾が長く、背面はレンガ色、腹面は白色。ただし三宅島産の個体は色が濃く、腹面も褐色を帯びる。主に植物の種子や根茎などを食べるが、昆虫類も食べる。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

樹林に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

三宅島では、2000年の噴火による植生の衰退と、1982年ごろに導入され定着したニホンイタチによる捕食の影響が懸念されている。短期の調査により本種の生息が確認できるので激減はしていないと思われるが、生息状況には不明点が多く、調査を行うことが望まれる。

【関連文献】

高田靖司ら, 1999; 阿部永(監修), 2008.



(執筆: 石井信夫・土屋公幸)

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名、配列は、次の文献に準拠した。

阿部永 (監修), 2008. 日本の哺乳類 改訂 2 版 . 東海大学出版会 . 206 pp.

【備考】 レッドリスト改定時における評価の根拠など補足情報

和名	備考
アカネズミ (三宅島個体群)	三宅島では放獣されたニホンイタチによる捕食の影響、および噴火による森林植生の衰退の影響を受けている可能性があり、NT に相当すると評価した。

【留意種とした理由】

和名	留意種とした理由
キクガシラコウモリ	個体数、生息条件について現状で大きな問題は知られていないが、ねぐらとなっている洞穴がふさがれたり破壊されれば地域個体群に大きな影響が及ぶ可能性があるため、留意が必要である。
コキクガシラコウモリ	伊豆諸島全体で見ると絶滅のおそれは低いですが、大島と御蔵島において、利用が知られていた防空壕が改変され、その場所での生息が確認されなくなった事例がある。このように、多くの個体が集中する洞穴がふさがれたり破壊されれば地域個体群に大きな影響が及ぶ可能性があるため、留意種とした。

【関連文献】

阿部永 (監修), 2008. 日本の哺乳類 改訂 2 版 . 東海大学出版会 . 206 pp.

天野典子・天野洋祐・成瀬裕昭, 2011. 伊豆大島におけるユビナガコウモリの初記録 . コウモリ通信, 18(1): 7-9.

Isono, T. & T. Inoue, 2009. *Zalophus japonicas* (Peter, 1866). In: Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa & T. Saitoh (eds.) *The Wild Mammals of Japan*, pp. 288-289. Shoukadoh.

佐野明・福井大 (監修), 2011. コウモリ識別ハンドブック改訂版 . 文一総合出版 . 88 pp.

高田靖司・酒井英一・植松康・立石隆, 1999. 伊豆諸島における小哺乳類の分布 . 日本生物地理学会会報, 54: 9-19.

和田一夫・伊藤徹魯, 1999. 齧脚類—アシカ・アザラシの自然史 . 東京大学出版会 . 284 pp.